
黯兎

大空 ~ sora ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黯兎

【Nコード】

N7372H

【作者名】

大空（sora）

【あらすじ】

ステイングマータを持つ少女、黯と見た目二十歳の大学生、進来のボケと突っ込み??のダークファンタジー!!!!だと思えます

プロローグ（前書き）

こんなくだらないやり取りを見ていただきありがとうございます。

プロローグ

プロローグ

「私の名前は伊瀬南いせな 黯世くろよの中の酸いも甘いも噛み分けた立派な立派な子供おとなです。子供と書いて大人です。エッヘン」

そんな声が聞こえた。まだ大人と子供の微妙な境にいることは見て分かったし、声もそれほど大人びてはいない子供の声だ。まあ、全てそれは僕の主観だが、これだけは誰もが疑問だったろう、「世の中の酸いも甘いも噛み分けた」突っ込んでも良いだろうか、酸いも甘いも噛み分けるだけお前は成熟した頭も体もしてないだろう！、と僕の人生で初めての、と言っても心の中だけの突っ込みセンスは良いのか、突っ込みは成功なのか失敗なのか突っ込みをしたことの無い僕にはまるで分からなかった。がこれからはこんなことが頻繁に起こるような気がして僕は内心ウンザリだった。僕に、平穩は許されないのかと思ってしまうほどのハードスケジュールが僕、扇あふち進来しんくには詰まっていた。詰まらせられていた。ん？………すいません、日本語が訳分からなくなりました。まあともあれ、言わずとも分かることだが今日僕はこいつと知り合った。伊瀬南 黯僕はこんなとても暗そうな名前の、見た目高1女子を助けてしまった。助けなければ良かったと思う自分が7割まあ後の3割はただの自己満足だった。

「それで、私を助けてくれるって本当ですか？進ちゃん」

「待て待て、僕はいつからそんな親しげな呼び方をされるようになったんだ？」

「私に名前を教えたしまった時からです」

「僕はお前に名前を教えてはいけなかったのか！？」

「はい、別に教えて欲しいとは頼んでいませんし」

こいつは、初対面のくせに言いたい放題傷つくこと言いやがる。

「ああ、間違えたホントは僕の名前、God's child ren って言うんだった」

仕返しに人生初めてボケてみた。

「そうなんですか、でもchild renのrはいりませんよ、とはいえこの名前からすると外人さんだったんですね」

撃沈、訂正された上に納得できてしまった。馬鹿なのかどうか全然分からん、素直に謝るか。

「悪い、嘘でした」

「ああ、そうなんですか、何か進ちゃんの言うことは信用したくないっちゃいます」

何で僕こんなに信用されてんだ？もしかして遊ばれてる？？

「お前、そんなに人を安易に信用するなよ」

「勝手に人を何の見返りも無く助ける偽善者にそんなこと言われたくねえよ!!」

「……えっ？この子早くもキャラ崩壊か？」

「いやそれはそうだけど」

偽善者……それは否めなかった。確かに僕は偽善者なのかもしれない。

「でもあのままだったらお前は死んでたんだぞ！死んでも良かったのかよ！」

「何を熱く語られてるんですか？今のは私なりの突っ込みですよ」

爽やかな笑顔で言われた。あんな紛らわしい突込みを聞いたのは人類初だったろう。小学生でももつとまじな突込みを用意してることだろうに。

「はつきり言って、お前絡みにくいよ！」

そんなことを、大声を張り上げファミレスを強制退場させられたのは言うまでも無かった。

歪な顔

歪な顔

ファミレスを追い出された僕たち2人は近くの喫茶店に懲りずに乗り込んだ。

「進ちゃんが悪いんですよ、あんな大声出すからあ」

まあ、こんな子供の嘘にと言うか、紛らわしいツツコミをされでかい声を出したのは僕だった。それも、ただむきになったからだ。

「お前いつまでその呼び方で通す気だ？」

「未来永劫だじえ！」

「だじえ？聞き間違いだろうか？今こいつだじえって言った？」

「今のはスルーだ、本題に入るぞ」

「えっ？今のどこにスルーする箇所があったのでしょうか？詳細な説明を述べてください」

「今のもスルーだ、本題のその顔について聞きたいんだが」

「まあ、後でじっくり聞きますねっ」

そんな笑顔で言われても、全然うれしくない。

「それにしても、私のこのかわいいロリ顔が気に入ったんですか？進ちゃん」

「自分で何の躊躇もなくロリ顔なんて言っただけじゃねえ！！何かそう見えなくもなくなってくるだろ！いやそれよりそんな馬鹿げた話じゃなくてもっと深刻なものだ！」

「と言うことは、進ちゃんもロリ顔だと思って接してくれるんですか」

「またも綺麗なくらい純粹な笑顔だった。埃ひとつ付いていないような、ついてはいいのだが。」

「僕はロリ顔との接し方なんてわかんねえよ！そんなことよりも僕にそんな趣味は無い！」

と言うか、接し方って？と言うか『進ちゃんも』、て言ったか？他に誰がそんな奇妙な接し方をしてんだよ！

心の中での精一杯の叫びだった。

そんな時、僕らの近くに誰かが近づいてきた、それに複数の視線も感じる。まずい、直感でそう思った。そしてそれは僕たちの座っているテーブルで止まった、勇気を出して僕はそいつらを見た、そこにいたのは……

「周りのお客様に迷惑ですのでそのような卑猥な言動をやめ、即刻当店からお引取り願います」

店員だった、そしてまたしてもレッドカードを出されてしまった。本日2件目。しかも今度は、店長らしき人に、ランクアップしていた。

「今度はどこで強制退場くらいしましょうか？」

また黯がムカツク発言をした。

「勝手に食らってる、何か馬鹿馬鹿しくなったから僕はお前を助けない」

勝手なのは僕だった、勝手に黒を助け、勝手に黯を見捨てた。

「それも嫌なので、この顔について真剣に話しましょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7372h/>

黯兎

2010年10月8日15時11分発行